



巻頭特集

## 世界のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

2011年12月9日、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』の著書で有名なエズラ・ヴォーゲル博士は、如水会館で「ポスト急成長期の中国と日本」というテーマで講演した。

そして、その熱が冷めやらぬままに、山内学長との対談に臨んだ。

ご自身の日本や中国との出会いから、ポスト『ジャパン・アズ・ナンバーワン』の日本、中国の台頭、さらには人材論まで、密度の濃い議論がかわされた。

# 比較文化を学び国際センスを身につけ 物事にひたむきに取り組む

## 日本とは「お見合い結婚」でした

山内 さきほどは、ご講演ありがとうございました。講演とも重なる部分がありますが、ヴォーゲル先生には、「日本」「世界」「人材」についてご意見をいただきたいと考えています。講演では学ぶことが大事だとおっしゃっていました。そこで、まず日本のことを勉強されたきっかけを、お聞かせください。

ヴォーゲル 私の父はポーランド生まれのユダヤ人で、第二次世界大戦の直前にアメリカに渡りました。当時は奨学金などありませんので、父は大学で勉強することができませんでした。学問へのあこがれを持ちながら商売をしていたこともあり、自分ができなかった学問を、自分の子どもにはさせてあげたいという思いが強かったのではないかと思います。

大学で私をかわいがってくださいました先生が、「君は外国のことを知らないが、アメリカ社会を知るためには、外国と比較したほうがいい」とアドバイスをくれました。ヨーロッパはアメリカと密接な文化的関係があるので、私は、ヨーロッパ以外の国に行きたいと考えました。理想的な国は、近代化しているがら違う文化を持っている国です。私は、「日本が好きだ」あるいは「知りたかった」というよりも、その発想から日本に行くのが一番いいと思ったのです。ですから私は、日本の友人に、「日本に来たの

は、恋愛ではなくお見合いだった」とよく言っています。愛してから日本とつながりをつくったわけではなく、客観的な研究をするためにつながりができたということです。



山内 聞くところでは、恋愛結婚よりお見合いで結婚した人のほうが長持ちするともいいますね。ところで、日本に来られた段階で、日本語は勉強されていたのですか。

ヴォーゲル 奨学金をもらうために、日本人の留学生から少し学びました。しかし、それは大きな間違いでした。発音が少々悪くても訂正されなかったからです。悪い癖がついた後で、もう一度日本語を勉



# エズラ・ヴォーゲル氏

1930年アメリカ生まれ。オハイオ・ウェスリアン大学、ハーバード大学に学び、1958年博士号取得。1967～2000年ハーバード大学教授。1972～1977年同大東アジア研究所長、1977～1980年同大東アジア研究評議会議長、1980～1987年同大日米関係プログラム所長、1995～1999年同大フェアバンク東アジア研究センター所長などを歴任。2000年より、同大ヘンリー・フォード2世社会科学名誉教授。1979年の著書『ジャパン・アズ・ナンバーワン』では、戦後日本経済の成功の秘訣を解説し、大きな話題を呼んだ。

強し直したので、正しい発音を覚えるのが大変でした。最初から正しい日本語を勉強したほうがよかったのです。

**山内** 日本語と中国語、どちらを先に勉強したのですか。

**ヴォーゲル** 日本語です。2年間日本にいて、1年目は日本語学校に行き、2年目は日本の家庭調査を行いました。それからアメリカに戻ったのです。ハーバード大学では、当時、現代中国研究をしている研究者がおらず、その育成を急いでいました。私は博士号を取っていましたから、白羽の矢が立ったのです。

**山内** 中国研究も「お見合い」だったんですね。

**ヴォーゲル** そうです。あまりにも早く教師になつてしまいました。日本語も中国語もあまり上手ではないときに。若いころにもっと勉強しておけばよかったと思います。正直、苦しい思いもしました。

**山内** 先生は若いころから、多言語をいとも簡単に駆使していらっしゃるのだと思っていました。お話を聞いて少し安心しました。我々日本人にとつても外国語の習得は、重要な問題ですから。

## 足りない点を 自覚して学ぶ姿勢が重要

**山内** さて、先生は『ジャパン・アズ・ナンバーワン』という著書をお書きになりました。日本人にとっては嬉しい本で、アメリカ人にとっては教訓的な本でした。日本は今、あのころと比べると低成長で「失われた20年」とまでいわれており、悲観的な面が多くなりました。少なくとも日本人は、日本はさまざまな問題を抱えていると思っと思っています。先生の目は、どのように見えますか。

**ヴォーゲル** どの国にも問題があります。日本は低成長時代になって金融危機の対応や政治に問題が生ずるなど、さまざまな問題があります。しかし、日本人は謙遜しすぎではないでしょうか。外国から見れば、ゼロ成長という問題があるにしても、比較的安全した金融システムや社会構造、団結する力、犯罪率の低さ、整った医療制度、学力レベルの高い義務教育……と、世界の多くの国と比較すると日本にはいい面がたくさんあります。



2011年12月9日  
山内学長との対談前に  
エズラ・ヴォーゲル氏の講演会が  
開催された。

**山内** 我々ももっと自信を持つていいのでしょうか。悲観することはないのでしょうか。

**ヴォーゲル** 「自分にはまだ足りないものがある」という精神で、もっと勉強する。それが一番いいと思います。

**山内** 学ぶということがつねに重要だということですね。

**ヴォーゲル** 学長が「学ぶ」という言葉を選んだのは素晴らしい。

 世界のリーダーが語る  
世界競争力のある人材とは？

# 一橋大学長 山内 進

1949年北海道小樽市生まれ。1972年一橋大学法学部卒業。1977年同大学院法学研究科博士課程単位取得退学。1987年法学博士。成城大学法学部教授、一橋大学法学部教授、法学部長、理事等を歴任。2004年、21世紀COEプログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」の拠点リーダーに就任。2006年副学長（財務、社会連携担当）、2010年12月一橋大学長に就任。専門は法制史、西洋中世法史、法文化史。『北の十字軍』（講談社）でサントリー学芸賞受賞。その他『新ストア主義の国家哲学』（千倉書房）、『掠奪の法観念史』（東京大学出版会）、『決闘裁判』（講談社）、『十字軍の思想』（筑摩書房）など著書多数。



**山内** 「今の若者は負担ばかりが多く、かわいそう  
だ」といわれます。統計的な数字だけをみれば、そ  
ういう面があるかもしれません。しかし、今の日本  
は素晴らしい資産を持っています。日本の隅々まで  
さまざまなサービスがいきわたっています。上下水  
道などのインフラしかり、医療制度しかり、義務教  
育しかり……。どこでも比較的高い生活水準を享受  
できます。こういう状態や自分たちの資産を、どう  
活かして生きていくのか。それを考えるべきです。  
そして、さまざまな国と交流して、自分たちを高め  
ていくという姿勢が必要ではないでしょうか。



世界のリーダーが語る  
世界競争力のある人材とは？

**ヴォーゲル** そう思いますね。

**山内** ありがとうございます。ですから若者には、「**そう悲観するな**」と言っているんです。「負担ばかり押しつけられる」と考えるのではなく、「先輩たちがつくってくれたものを大事にしなごら、自分たちがさらに発展させていこう」という精神を持つてほしいと考えています。結局、最後は自分で道を見つけるといことになるでしょう。そのためには、大学はできる限りの協力をします。自分たちがバトンを受けて、社会を形成していくわけですから、さらに一生懸命勉強して、そのために力を尽くしてもらいたいですね。

**ヴォーゲル** 私は学生によくこう言います。将来の仕事限定して考えてはいけません。何か仕事に就いてから、その仕事のなかで「これをやりたい」というものを見つけることです。どんな仕事でも一生懸命やればよい。たとえば、学生時代のアルバイトであったとしても、真摯な態度で取り組むことが大切です。

## 日本の課題 中国の課題

### 国際センス

**山内** 先生のもう一方の専門である中国にも、課題

があります。隣国のことですから気になります。中国の成長により、アジアから世界へという新しい動きが始まっているようにみえます。EUはいいポジションで力を発揮していましたが、最近ではユーロ問題が深刻化しています。ほんの10年ぐらい前までは、アメリカの一極支配が進み、「アメリカ帝国」といわれたときもありました。現在はアジアが力をつけてきて、次

はアジアの時代だともいわれています。そのようなか、中国の持つ意味は非常に大きいと思います。

**ヴォーゲル** 中国は大きいので、一口には言えない面があります。私は、共産党が指導者養成をかなりうまくやっているとします。さまざまな経験を積ませ、問題解決の方法を教え、うまく指導者を養成しています。数年前までアメリカ人は、中国は世界のステークホルダーであり歓迎するという姿勢でした。中国も最近までは低姿勢で、自分の国を守るために外交を行ってきました。今は力をつけてきたので保護政策ばかりではなく、世界の秩序の構築に貢献する必要があります。一部の指導者は自覚し始めています。世界の環境問題、地球温暖化など、自分たちも力を入れないと解決できないと自覚しつつあるのです。環境問題の会議などで、これまで中国が果たしてきた役割は物足りなかったと多くの国の人はずかしく思っています。しかし、中国人には勉強する気持ちがありますから、将来的には多少は積極的に取り組むようになる可能性があるでしょう。ただ、中国には自由の問題があります。技術はまだですがが確実に進歩していますし、金融力があります。しかし、自由という問題が解決しないうちは中国がアピール力を増すのは難しいと思います。

**山内** 自由の問題は大きいですね。環境問題について言えば、アメリカの態度もあまりよろしくくない(笑)。基本的にアメリカにはいい面が多いと思っっている人が多いので、批判はするがアメリカが好きだという人が多い、というのが現実でしょう。

**ヴォーゲル** 「我々の民主主義は正しいのだろうか」「今の民主主義のやり方はまずいな」など、私の友人

にも心配する人が増えてきました。

**山内** 日本にも共通する問題だと思えます。日本が大変なのは、首相が議員のなかから選ばれることだと思えます。アメリカには大統領がいて、国民が直接ふさわしい人を選ぶことができる。日本の場合、もどかしいのは、「この人は本当に首相にふさわしいのだろうか」という人が、政党のパワーバランスで選ばれることがあることです。しかも、日本の政界には、特殊な人が多いように思えます。ビジネスの世界には優秀な人が多いわけですが、そのような人々が政治の世界に飛び込み、経験を活かして日本社会をさらによくしようとするのが少ない気がします。幅広い分野の人材が政界に入り、選挙民の細かい注文にこだわらなくとも政治ができるような仕組みがあれば、さらにいい政治ができるのではと思います。

**ヴォーゲル** 国会議員の息子なら国会議員になれますが、野心を持つている若者にはチャンスが少ない。そのため、松下政経塾がいいルートになっています。数回松下政経塾を訪ねて、若者たちと話しましたが、非常に楽しかった。ただ、松下幸之助氏は経営者としては素晴らしかったが、松下政経塾ではやや古い30年代の日本の精神を重んじすぎたと私はみています。環境問題意識やグローバルセンスを持つべきだといったビジョンに弱いところがあります。その点



で物足りないところがあると感じています。

私は鄧小平の研究をしています。彼は、16歳からフランスで5年間過ごし、その後ソ連で1年間過ごし、海外のセンスが身に付いていました。海外から何を学ぶか、どう勉強するかといったセンスがあったのでした。残念ながら松下政経塾出身者には、そのようなセンスが身に付いておらず、世界ビジョンがじゅうぶんにはわかっていない人が多いようにみえます。外国人の偏見かもしれません……。

## 理想を持って上を目指す

**山内** 人材についての話が出ましたので、もう少し掘り下げたいと思います。大学では、どのような人材を育成すればいいか、そしてその育て方について、つねに考えています。これからの社会で必要な人材育成についてご意見をうかがいたいと思います。やはり海外で学ぶ経験が大事なのではないでしょうか。

**ヴォーゲル** いくつかの面があると思えます。一つは、歴史や先人の経験をよく勉強すること。今のアメリカでは、経済学と政治学の方法論や理論ばかり押しつけているところがあって、物足りません。やはり、比較政治や比較歴史などを勉強すべきです。これは教育の非常に大事なところだと思います。もう一つは、何かを自分で経験すること。たとえば、



大学新聞の編集に携わる、大学時代に起業する、組織をつくるなどです。卒業後でもいいのですが、自分でこれをやったという経験をしてほしいですね。もう一つは、海外との接触です。たとえば、国内で外国人と接触したり、海外に行って数か月から数年間暮らすなどして、友だちづくりを通じて外国人を理解する。さらに、思想家などと接触して、その思想はどのようなものか、またその人物について知る。こうして、さらに上の領域を目指すことです。「人々のため、世界のため、仲間のため」、そのような理想を持つてもらいたいですね。

**山内** 確かに、自分の理想を持っていないと、「学生時代を楽しく過ごしました」で終わってしまいますね。**ヴォーゲル** 自分の仲間のためといったものでもいいのですが、人々のために何かをやりたいという気持ちが必要です。

**山内** その点が少し日本人には弱いかもしれません。我々は一生懸命勉強し、仕事をします。しかし、「高い理想を掲げる」というところが足りないような気がします。

**ヴォーゲル** 1950年代はまだ貧しい時代でした

が、日本の友人は、皆のためによりよい生活を実現したいという気持ちがありました。松下幸之助氏は、「誰もがテレビを見ることができるよう」「皆の生活の楽しみのために」という理想を持っていました。貧しい時代だったからこそ、日本の友人はそのような理想を持っていました。

**山内** それは明快な目標ですね。今よりさらにいい生活、豊かな生活を追求する。そのような面ではかなり成功したような気がします。成功したゆえに、次に何をすればいいのかが、わからなくなってしまうたのかもしれない。

**ヴォーゲル** 日本の友人のなかにJICAで仕事をしている人がいます。「全世界の人々が医療を受けられるように」「ほかの国の将来のために」「環境問題のために」……、そう考えて行動している日本人もいます。

**山内** 我々自身の生活をよくしていこうといった身近なところについては、今までどおり研究していけばよいと思いますが、併せて、環境問題や文化的な問題、大きく言えば平和問題など、対処すべきことはたくさんあります。今の若者のなかには、そうした意識を持っている人も少なくありません。日本全体に余裕が出てきて、視野が広がってきたからでしょう。ただ、生活水準が高くなってきたため、頭ではわかっているけれども実行に移すのはなかなか難しくなりました。我々としては、行動に移せるような環境づくりをしていく必要があります。

**ヴォーゲル** ポストン近辺で何人もの日本人留学生と接触していますが、優秀な者が多く、人材のベースはあるように思います。



 世界のリーダーが語る  
世界競争力のある人材とは？

**山内** 日本社会の欠点は、海外経験を積んだ者が帰国しても、うまくはまる空間がないことです。日本では、一斉入社で下から積み上げていくのが一般的です。その基本システムから外れると能力を発揮できません。そのあたりは、自分たちが変えていかなければなりません。

**ヴォーゲル** この国でも共通するアイテムがありますから、日本に帰国した優秀な人材がまた海外に流出しなくとも活躍できるようにしたいですね。中国では、問題をもっと深刻かもしれません。海外で自由な考え方を身につけて帰国すると、国内では愛国主義が足りないと思われる、じゅうぶんなチャンスを与えられません。国の将来を考えれば、そのような人々に活躍してもらわなくてはなりません。

### 企業トップも重視する海外経験

**山内** 最近、何人かの企業の方と会って、「企業はどのような人材を必要としているか」「大学にはこのような人材がいるので、もっと採用してほしい」といった話をする機会がありました。企業の方のほうはたいへんオープンで、さきほど話題になった海外で活躍してきた人材がほしいと言っています。



「しかし、一斉採用で海外組は排除されるので、学生は海外に行きたがらない」と言うと、「そんなことでヘジテイト（躊躇）しているようではだめだ」と言います。そのあたりは、トップと採用現場との温度差があるかもしれませんが、日本でも企業の方の意識は変わってきています。それくらいでないとい日本企業もやっつけいけない時代になってきたのです。



我々としては、一橋大学の学生を積極的に海外留学させて、多くの経験を積んでほしいと考えています。社会人でも、海外での経験によってむしろキャリアがよくなっていくように、日本社会全体が変わっていく必要があります。

特に、日本企業のグローバル化は進んでいますから、採用方法も変えていかなければという意識が高まっています。世界中から優秀な人材を採用したいという考え方が強くなってきました。

一橋大学の学生にとっては、世界中の学生と競争するので、ほんやりしては行かないわけですね。日本も、企業も、大学も変化しつつあります。それにつけても、日本人の種は語学です。先生は日本語と中国語ができますが、言葉を身につけ

るうえで重要なことは何でしょうか。

**ヴォーゲル** 私の場合は悪い例で、年齢を重ねてから学んだので大変でした。しかし、ハーバード周辺では、親の海外赴任に伴って国際学校に在籍している子どもたちがいます。こうした子どもたちにとって素晴らしいのは、両方の文化を自然に吸収できることです。高校か大学時代に1〜2年間、海外に留学するのもいいでしょう。アメリカの高校に入ればネイティブな英語ができるようになります。私の息子は、高校時代に2年間ほど日本に留学し啓明学園で学んだので、父親の私よりも日本語がうまい。しかも、日本の若者文化にも触れることができました(笑)。若いころに海外に行くと自然に言葉を覚えます。教育面では、高校で外国人教師が英語を教えられる。発音が悪い先生に習ってはいい生徒が育ちませんが、自然な英語が話せる教師を採用することです。日本人は照れ屋が多いので、間違えることを恐れませんが、生の英語に触れるチャンスは早く与えたほうがいいと思います。

**山内** 日本の英語教育については、どのようにお考えですか。

**ヴォーゲル** 詳しくは知りませんが、聞いたところ



うね。これは考えなければいけない問題です。

## 明治維新、

## 終戦後に続く変革のとき

によると、日本の英語教育は入学試験のための教育のようです。文法などより、もっと自然に理解し話せるようになる入学試験の方法があれば、高校の英語の教え方が変わっていくと思います。

**山内** 私もそう思います。入学試験のあり方が変われば、英語教育も大きく変わるでしょう。

**山内** 先生の『ジャパン・アズ・ナンバーワン』は今

も非常に有益な著作ですが、私は特に日本社会の特質を「フェア・シェア」と指摘されていることに感心しました。これは素晴らしい指摘だと思います。「フェア・シェア」という特性のおかげで、日本では、社会的に成果を上げて、人々が皆、水準の高い暮らしができるようになっていく。これはよい面です。逆にそれが仇となり、「スクラップ・アンド・ビルドをしないとイケない」という場合でも、なかなかそれができません。この二つの絡み合いが日本をつくっている。

**ヴォーゲル** そう思いますね。「フェア・シェア」はいい面があります。社長の月給と社員の月給の差が中国では100倍、アメリカでも社長と社員とは大差があります。競争はいいのですが、差はそれほど大きくないほうがいい。

**山内** 日本には多くのいい点があります。もちろん、欠点もあります。他国に学びながら、欠点を直すことが重要です。日本は今、国債発行累計額は大きいし、年金制度についても人々が不安を抱える、危ない状態にあります。日本が今、すべきことは何だと思えますか。

**ヴォーゲル** 国際教育です。まず英語、そして外国の状況を学ぶこと。さらに、日本の制度の問題があります。自民党は55年体制が崩れたときに新しい制度を構築することができませんでした。言うは易くで、実現するのは大変ですが、大胆に新しい制度を構築すべきですね。日本は、明治時代と終戦直後には新しい制度を多く取り入れる覚悟をしました。今の時代に必要なのは、政党政治の新しいスタイルを構築していくことです。

## 一橋大生への三つのアドバイス

**山内** これまでのお話を踏まえて、社会科学の総合大学という特色がある一橋大学で学ぶ学生に、アドバイスをお願いいたします。

**ヴォーゲル** まず、学生には歴史と政治の比較文化をじゅうぶん学んでほしい。二つ目は、機会があれば、海外に行き外国人と接触してほしい。外国語を勉強してから海外に行くことです。三つ目は、どのような仕事でも一生懸命取り組むこと。そしてその仕事で力をつけて、よりよいポジションを目指してほしいということです。以上が、年配の外国人からのアドバイスです。

**山内** どうもありがとうございます。